

## STE (Shiroi Teaching Expert) の授業紹介 No. 9

### 白井市立大山口中学校 三上 浩司 先生 (数学科)



11月19日(金)、3年生の数学科の授業でした。「相似」の学習でしたが、今まで見たことのない授業スタイルでした。それは「教えたい心をぐっと我慢して『教えない授業』」というスタイルです。三上先生は、上越教育大学の西川純先生の本に出会い、「こんなことができるのか。」と思いつつ実践してみたら「これはすごい。」と実感し、以来、この「教えない授業」を続けているそうです。以下にその授業を紹介しますが、きっと?がたくさん浮かぶと思います。また、根本となる考え方をしっかりと理解する必要があります。もっと知りたい方は、西川先生の本を是非読んでみてください。

#### 工夫1 「教えない授業」とは

単元の授業構成は、①今日学習する教科書のページを指定し、自分たちで読み解いていく。②学んだことを基に自分なりのレポートを作り、説明し合う。大きくこの2つに時間を分け、生徒同士で学んでいきます。

①の時間は、誰に聞いても良い、いつ答えを見ても良い、立ち歩いても良いという時間です。自分で教科書を読み解き、分からなければ友達に聞いたり、答えから考えたり、情報を交換し合ったりして学んでいきます。課題をクリアしたら、ネームプレートを動かし、自分の進捗を示していきます。

②の時間は、分かったことをまとめたり、タブレットを使って同じ単元の受験問題を調べたり、日常で使われている場面を調べたりしてオリジナリティーのあるレポートを作成し、最後に説明し合ったり、問題を出し合ったりして理解を深めます。

今、担当している3年生は2年間これを続けています。単元の配当時間よりも短い時間で単元学習が進んでいるとのことでした。

#### 工夫2 教師はファシリテーター

では授業中、三上先生は何をしているのでしょうか。先生は、自分の目で一人一人を見とり、今その生徒に何を助言すればよいのか、全体に何を投げかけ、考えさせればよいのかを常に考え、生徒の間を回っています。ネームプレートを動かすという行為の真の意味、周りを見て自分はどう動けばよいのか、自分の考えを広げるために何を活用するのか、常に生徒の頭を動かすために三上先生の頭の中も動いています。「黒板を使って授業していた頃より、よっぽどやるのがたくさんあります。」と言うとおり、一人一人の頭の中の動きを把握して修正するための助言をしたり、高まりを称賛したりと、全力で生徒と向き合っています。授業の最初と最後に、三上先生の「思い」を必ず伝えているそうです。

#### ★三上先生が大切にしていること★

- ・分からないことは恥ずかしいことではない、このことをしっかりと教える。そして、一人も見捨てない、クラス全員が課題を達成することを常に大切にし、クラスを育てている。「自分たちでここまでできる。」生徒の新たな力を発見する度に喜びを感じている。
- ・将来、自分で文章を読み取り、考え、伝えていかななくてはいけない。自分で苦労したことは残る。自分自身で頭を動かして、これからの社会を生き抜く力を身につけてほしい。「分かりやすく説明するにはどうすればよいかを考えています。」「伝える力がついてきたと感じています。」「問題作りを調べていくうちに理解が深まりました。」と生徒たちが自信をもって教えてくれました。誰一人として学びから逃げていない授業でした。